

奨学生選考 総評

大学生、高校生が応募の主体ということもあり、新たな可能性を感じさせてくれる作品に多く出会うことが出来た。今回からは自身の作品の中から10作品を選んで応募するというかたちになっており、応募者は、作品の提出の仕方も問われることとなった。作品のうち何作品かはとても良いものがあった場合でも、全体を見て敢えて推さなかった応募者もあった。また私の選は飽くまで私ひとつの尺度しか表さない。だから、応募者は今回の結果がどうであったとしても、それだけにこだわるのではなく、書き続ける理由があるならば、それを大切にしたい。

全体の作品の印象であるが、多くが一定以上の水準に達しているように思えた。特に、複数の選考委員の推薦があり、奨学生に選ばれた応募者については、それぞれが固有の文体、言い換えれば表現の核を有しているように感じた。特に表現の完成度が高く感じられたのは、定型の俳句の方法をベースに表現している細村星一郎（東京都）（梅雨の星／キリンの濡れた目のなかに）や、長谷川柊香（宮城県）（冬の雷出席に○ゆっくりと）等の作品である。この若さで、これだけ完成度の高い作品を生み出せることを思えば、今後の活躍が大いに期待できる。

他に、注目した作者としては、短歌の韻律をベースに書いていると思われる白野（新潟県）（文集が黄ばんでゆくたび過去に／見た鳥のなきごえがきれいになる）、様々な方法で表現を試みながら鋭い感受性を感じさせる作品を応募してくれた藤色（京都府）（わたくしから はみ出たものを／なかったことにして／カミソリは光るのを止めた）、定型感を敢えて捨てたうえで、独自の世界の表現に挑戦している青木雅（埼玉県）（びしょ濡れの短歌の僕が先に行く）等がいる。

私が選考委員を始めてから二回目の奨学生選考となる。すばらしい作品に出会ったときのうれしさは言葉に言い表すことができない。今後も皆さんの作品を楽しみにしている。

西躰 かずよし